

かわらばん

第3号 2015年11月20日



本
の
紹
介

平和について、戦争について
考えるために



『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』

小熊英二著（岩波新書、2015.6）

戦後七〇年の今年は、高齢になった戦争経験者が体験を語り、安保法制が国会に出されたことで、多くの人が戦争と平和を、憲法を考えた歴史に残る年である、と言える。

敗戦時私は四歳少し前で、防空壕に逃げたことしか記憶になく、親に戦争のことを聞いても親は語らなかつたが、今年八三歳になった姉から敗戦前後の体験を、身に迫る緊張感をもって聞いた。それらをまとめて子ども達にも伝えた。それと前後して読んだのがこの本である。

本書は著者が、父小熊謙二から話を聞きまとめたものだが、著者が言うように「一人の人物の軌跡であると同時に、法制史や経済史などを盛り込んだ、言わば『生きられた二〇

世紀の歴史』である」。よき聞き手を得て小熊謙二氏（以下謙二と記す）は、よく語つたが、過大な表現もなく、淡々としているとも言える（著者によれば人間観察力と、背景を分析する力が寄与している）。内容は次のように重く、私達の想像を超えるものだ。

一九四四年一月に一九歳で入営、一月八日満州の関東軍直轄部隊に配属され、一九四五年八月一日の敗戦を告げられ捕虜としてシベリアのチタ収容所に送られた。多くの戦友が死亡するような強制労働、捕虜生活。

一九四八年八月帰国を果たすも、敗戦後の日本での生活は厳しく、戦前勤務していた会社で「シベリア帰り」は敬遠され復職できず幾つもの職を転じた。その過労や栄養不足から、一九五一年一月結核の診断を受け、五年間三〇歳まで療養所ですごした。

一九五六年高度経済成長に入っても謙二は「まるで浦島太郎のようだった」。

その後は自らの力で仕事を軌道に乗せ生活は徐々に安定した。その中で日本はもちろん世界の動きにも関

心をもち、語る言葉、行動には、あの戦争での経験に基づく強い力が感じられる。

例えば、ベトナム戦争について「とにかく戦争は嫌だった。ソ連圏が広がってくるのは反対だが、戦争によってそれを防ぐのにも反対だった」と述べている。また、ソ連体制下の東欧、特にポーランドの「連帯」運動に強い関心を持ち、ベルリンの壁崩壊後に東欧を度々訪れている。

私は一九七〇年〜七二年にかけて西ベルリン*で過ごし、東ベルリンの人々の生活も見聞きしていたので、背きながら読んだ。（*ドイツは冷戦時代東西に分割され、東ドイツはソ連圏にあった。その中に離れ島のように西ベルリンがあった。一九八九年ベルリンの壁崩壊。一九九〇年東西ドイツ統一）

しかし私が最も心を打たれるのは、戦後補償裁判に至る謙二の行動である。

一九七九年に謙二はチタ収容所時代に亡くなった戦友の遺族を探して、死んだときの様子を話し「肩の荷を下ろしたような気がした」という。一九九一年チタを訪問し市民墓地に戦友の墓標を建てた。

その少し前一九八八年日本政府は

ソ連抑留者に「慰労金」を出すことになった。請求資格は軍人恩給欠格者。謙二は当初「戦争の責任も明らかにせず、高級軍人には恩給を出しながら……ごまかしだ」と受けとめ請求しなかつた。しかし一九九〇年に請求した。同じ收容所にいた朝鮮系中国人の元日本兵の呉雄根に請求資格がないことを知り、彼と分けあおうと考えたからで、実際分けあつた。呉雄根から深い感謝とともに「自分にも請求権があるはずだが……」

との手紙が来た。一九九六年に呉は訴訟を起こし、謙二に共同原告になつてほしいと誘つた。謙二は承諾し、意見陳述書で「私が原告になつたのは金銭が目的ではありません。本裁判を通して日本が真に人権を尊重する国になつてほしいからです。欧米諸国では補償で国籍などの差別をしていません」と述べたが、結果は棄却であつた。

これらを読むとき、安倍首相談話の言葉は何と軽いことか、と私は思う。

現在八九歳の謙二は家事をこなして毎日を生きている。「アムネスティ」「もやい」「ペシワール会」「加多厨」(老人世帯への給食宅配)「国

境なき医師団」などに会費を払い、「良心の囚人」の収監に抗議する英文の葉書を送っている。

謙二の、人生と人間観に根を下ろした自立した行動は、私たち「一票で変える女たちの会」にも通じるところ。

(二〇一五年一〇月 伊東輝)

「帰還兵はなぜ自殺するのか」



デイヴィッド・フィンケル著 古屋美登里訳 (亜紀書房 2015.2)

二〇一五年六月から七月にかけてのいわゆる戦争法案に関する衆議院特別委員会で注目を集めたテーマの一つが、自衛隊員の海外派兵の拡大で自衛隊員のリスクが増すという問題である。当初、総理大臣や防衛大臣はリスクが増すことを否定していたが、審理が進むにつれて、いやいやながら認め始めた。報道によれば、防衛大臣は六月一五日の委員会で「自衛隊が海外で活動する機会の拡大に伴い、心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症する隊員が増える可能性を認めた。」という(東京新聞二〇一五年六月一六日)。この質疑で引きあいにされたのは、イラク戦争に派遣されたアメリカ兵士たちの実例であつた。

本書は、まさにこの問題を正面から見据えたすぐれたルポルタージュである。著者は、「ワシントンポスト」で二三年間にわたりジャーナリストとして働き、二〇〇三年にはピューリッサー賞を受けている。「記者あとかぎ」によれば、著者は二〇〇七年から一年間イラクに派遣された兵士たちと現地生活を共にし、それを詳細にレポートした。しかし、彼は、戦争そのもののレポートだけでは、戦争の実態は伝えられないことを、帰国後受け取つた多くの兵士たちの手紙などから思い知らされた。戦争が派遣兵士とその家族に引き起こした「その後」まで報告しなければ戦争の全貌は見えてこないことを思い知らされたのだ。

著者は、五人の帰還兵とその家族に「戦争の後、戦争の痕」を取材し

て、ルポルタージュ(Thank you for your service、「祖国へのご奉仕に感謝する」)を書いた。その衝撃的な内容が全米を揺るがしたであろうことは、この作品が多くの賞を受けたことから理解されよう。「記者あとかぎ」は、衝撃的な数字も伝える。イラク・アフガン戦争に二〇〇万人の兵士が派遣され、そのうち五〇万人がPTSDとTBI(外傷性脳損傷)に苦しんでいるというのだ。

著者が密着取材したのは、そのうちの五人とその家族であるが、彼らが特殊であつたわけではない。彼らは身体的な傷害を負っているわけではないが、精神的に大きな傷害を負っている。しかし、見かけだけでは、心の傷は見えない。性暴力被害者のPTSDが「傷」として外からは見えにくいために、家族を含めた周囲の理解を得にくいだけでなく、PTSDによる無気力な(と見える)生活は、ときに自責の念を強めることは、ようやく日本でも知られて来た。アメリカの帰還兵たちが直面している困難もこれと共通している。もともと、PTSDという認識は、アメリカでベトナム帰還兵の精神疾

患の研究から生まれたという歴史をみれば、これは頷ける。

「PTSDの発症に影響する最も重要な因子は、外傷的事件にさらされている期間、近接度、および強度であることが明らかになっていす。性暴力ではまさにその三点が揃っているわけです」。さらに「自己の内部や皮膚に、五感としてトラウマが刻印されるということは、自己の身体がフラッシュバックなど再体験症状のトリガーとなりうるということです。また、フラッシュバックのたびに、被害時のあらゆる感覚が甦るのも耐え難い苦痛です」（宮地尚子「トラウマ」岩波新書一三二〇―一三三頁）。

アフガニスタンやイラクで「戦った」兵士たちに起きたことは、まさにこれであった。確かに彼らは戦争という人殺し行為の実行者ではあるが、イラクで彼らが実際に体験したことは、目の前で同僚が軍用車両に乗ったまま爆破され、同僚の身体は一瞬にして木っ端みじんに砕け散ったという経験、「敵」に打たれて血まみれになった同僚を担いで避難するとき、同僚の血が自分の口の中にごくどくと入ってきたその時の感覚

を記憶している自分の神経と肉体。彼らは心身に深く刻印された記憶から逃れることができない。眠ることもできない。夢に出てくる恐怖経験は、いかなる治療でも彼らから消えることはない。戦争手段が「近代化」すればするほど、日本刀での斬り合時代には想像できないほど、被害は敵味方なく拡大し、「痕」は消すことのできない永遠のものとなる。

確かにアメリカでは、帰還兵の自殺防止のために膨大な経費が費やされ、ペンタゴンのガードナールームでは、定期的に自殺兵士についての事例報告と自殺防止のための検討会が開かれている。しかし、今のところ、何もこれといって功を奏した対処方法は発見されていない。心を病んだ兵士たちは、山ほどの投薬をされるが、それが効いたということもないようだ。専門家のカウンセリングも受けることができるが、自殺者は減ることがなく、家族ともどもの悲劇は止まらない。

彼らの平均年齢は若く、妻も子も若い。内面が壊れた兵士は経済的にも一家を支えることができなくなってしまう。彼らの多くは、もともと貧しく、軍隊勤務を貧しさからの脱

却の手段として選び、帰還後には危険な兵役で手にしたお金で計画していた新しい人生を歩み出せるはずであった。妻も夫の新しい人生に自分の夢を重ねていた。希望とは裏腹に、実際に起きたことは、内面と共に彼らの未来も崩壊してしまい、かけらを拾い集めても再構築することができないという抗いきれないことであった。

戦争の「痕」の無残さを読み続けるには、こちらにもかなりの力が要求される。アメリカの医学、経済力等をもつても「治療」できないことがはつきりしてきたこの悲劇を繰り返さないためには、方法は一つかあるまい。戦争を止めるという単純なことである。しかし、今苦しんでいる人にはこれは無策だ。

もちろん、苦しんでいるのは、帰還兵とその家族だけではない。本書にははつきりした形では登場しないが、彼らと同じ数かそれ以上多くの「敵国」の兵士やその家族たち、無関係であった女・子どもたちの受けた被害のこともきちんと考えねばならない。彼らの人生も希望も崩壊させられたのだ。イラクの人々にアメリカレベルの医療的対応がされたら

は、とても考えられない。

戦争の「痕」を作らないためには、戦争そのものをやめるしか術はないことが、じつくりと腑に落ちる本である。今の日本人が、心して読むべき大事な本である。戦争しない国にとどまる勇気が、今ほど切望されているときはない。

(二〇一五年七月 角田由紀子)

支援教育センター通信46号より



『一票で変える女たちの会』かわら版

*ネットやメールを利用されない方には印刷版をお届けしています。ネットでご覧になる方も、ぜひ印刷してご友人・知人の方に紹介してください。

★投稿大歓迎。本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見、なんでもお寄せください。(一本について、一二〇〇字〜一六〇〇字)

投稿先: 1pyodakaeru@gmail.com

郵便の場合

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1の1

東京ボランティア・市民活動センター

メールボックスNo. 45

FAXの場合 03-5684-1412